

学士課程教育のグランドデザインに基づく

質保証のための取り組み（報告）

Approaches for Quality Assurance Based on the Grand Design of Baccalaureate Degree Program

近藤 伸彦

CELL 教育研究所研究員

大手前大学では、教育の質保証の観点から、卒業時に到達しているべき人材像を定義し、これを育成するような学士課程教育を構築するためのグランドデザインを制定している。あらゆる学生が卒業時に目標を達成するよう、全ての教育活動はこのグランドデザインに基づいて設計することとしている。

本稿では、近年あらゆる大学に要請されている「学士課程教育の質保証」の流れを概観したうえで、大手前大学がこの数年来の大学改革を通してどのように「質保証」の実現に向けて取り組んできたのかについて、2011年に策定した「4年間にわたるリベラルアーツ型教育のグランドデザイン」を中心にまとめ、その取り組みに関する現状を報告する。

キーワード：学士課程教育、卒業生の質保証、学修成果の実証、グランドデザイン

1. はじめに

中央教育審議会（以下、「中教審」とよぶ。）の各種答申において提言されているように、ユニバーサル・アクセス時代における大学教育の質保証は喫緊の課題である。昨今では、「何を教えるか」ではなく「何ができるようになるか」が重視され、国際的に通用する「学士」の資質を養成する「学士課程」をいかに構築するかが、いずれの大学においてもますます重要になっている。

大手前大学（以下、本学とよぶ。）は、2007年度の3学部改組を機に、全学的な教養教育を基礎としたリベラルアーツ型の学士課程教育への転換を遂行してきた。2011年には、本学における「学士」の到達点を定義し、多様な学生をその達成へ導くための教育の実現に向けて、学士課程教育のグランドデザインを制定した。

本稿では、近年の「学士課程の質保証」に関して概観したうえで、本学における質保証とそのためのグランドデザイン制定について報告する。

2. 学士課程教育の質保証

2.1. 学士課程教育

ここでは、近年の中教審の答申から、学士課程教育とその質保証について高等教育が要請されているものについて概観する。

まず、2005年の答申「我が国の高等教育の将来像」においては、知識基盤社会における人材育成において極めて重要なものとして「高等教育の質の保証」について言及されている（中教審 2005）。大学はそれぞれの個性・特色に応じて緩やかに機能分化するとともに、学習者の保護と国際的通用性の保持のため、その質を保証することが求められる。また、従来、学部・学科など組織に着目して整理されてきた大学は、学士・修士・博士といった学位を与える課程（プログラム）中心に再整理することの必要性も提言されている。ここでは、多様な学士課程のありかたの一つとして、学部段階では教養教育と専門基礎教育を中心とした主専攻・副専攻の組み合わせを基本とし、専門教育は大学院以降に完成させる「総合的教養教育型」なども提起されている。

これを受けて、2008年の答申「学士課程教育の構築に向けて」においては、学部段階の教育は「学士課程」と称され、学部・学科縦割りから脱却した「学士課程教育」の概念を広く知らしめることが狙いとされている（中教審 2008）。本答申では、グローバル化する知識基盤社会において、学士レベルの資質能力を備える人材養成が重要な課題であることがあらためて提言され、学位の国際的通用性を担保するために学士課程教育における3つの方針の明確化を進める必要性が謳われている。とくに、学位授与の方針の具体化の必要とともに、学士課程共通の学習成果の具体的な参考指針として「学士力」が提示されている。また、本答申には「大学が幅広く多様な学生を受け入れ、学士課程教育を通じて、自立した市民や職業人として必要な能力を育成していくことが求められる」という文言もある。このような能力は「就業力」と呼ばれるものにあたり、2010年には、大学設置基準においても、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するための体制の充実を図ることとする条項が追加されている。

続く2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」においてもその基調は変わらず、「学修時間の増加・確保」を核として、体系化された教育課程のもとで組織的・全学的に教育を実施することを強く提言している（中教審 2012）。

2.2. 本学における総合教養教育型大学への改革

2.1で示した中教審の答申に代表されるように、時代に則した国の要請は、ユニバーサル・アクセス時代における多様な学習者に対する高等教育の質の保証という形で現れている。個々の大学はその機能と位置づけを自ら選択し、個別の特色を活かしながら社会に貢献する大学づくりが求められているといえる。

本学では、こうした要請を踏まえ、2007年に従来の2学部5学科から3学部3学科への改組を行い、「リベラルアーツ」型の教育を使命とした大学への改革をスタートさせた。絹川は、リベラルアーツ大学の特徴として、「学生の自己教育（主体的学習）を基本とする」「専門を早期に固定させない（Late Specialization）」「専門科目を教養として学ぶ」「一般教育を行い、教育に社会性をもたせる」「批判的思考力・課題発見・解決能力を育成し、知的営みの基礎能力を養成する」「キャンパスライフ等の潜在化した学習過程を重視する」の6点を挙

げている（絹川 2006）。これらをもとに、知識基盤社会を生き抜く人材を育成することがリベラルアーツ大学の使命であり、前述の「総合的教養教育型」の学士課程教育は、このリベラルアーツをベースにしている。種々ある大学の形の中で、本学は「総合的教養教育型」により世に貢献することを選択したといえる。

本学は、先に述べた学部改組にともない、他学部の全ての授業を自由に履修できる「3学部クロスオーバー」や、関連する科目をまとめたユニット単位で自由に学びを設計できる「ユニット自由選択制」を導入した。主専攻・副専攻（メジャー・マイナー）は学部を超えて構成され、学生は所属学部に関わらずいずれを専攻することも可能とした。学部の壁を限りなく低くし、カリキュラムに自己選択構造をもたせることで、自己教育にもとづくLate Specializationを実現する仕組みを設けたのである。ここで獲得されるリベラルアーツ的な専門性を「自分で創る専門性」と称した。また、専門を知識として学ぶことにとどまらず、社会で必要とされる社会人基礎力、問題解決力を身につけさせる指針として、10の能力からなる独自の社会人基礎力体系「C-PLATS」を制定し、あらゆる学習活動においてこれらの能力を育成することとした。リベラルアーツ型教育の中で、この「自分で創る専門性」と「社会人基礎力」を身につけるためのあらゆる教育機会を提供することが本学の使命である（大手前大学 2014）。

2.3. 本学における卒業生の質保証

リベラルアーツ型教育への転換をベースに、本学が保証すべき「学士」の質を明確化することが議論された。この議論を経て、2011年には、①リベラルアーツ型教育を通して「自分で創る専門性」を身につけていること、②C-PLATSに基づく社会人基礎力を身につけていること、③専門性と社会人基礎力を統合し、広く一般から認められる「就業力」を目に見える形で実証できること、の3つが全学部にあたる卒業時の目標と定められた。これらを踏まえ、本学の学位授与の方針（ディプロマポリシー）は、次のように定められた（大手前大学 2014）。

【大手前大学の学位授与の方針】

大手前大学の学生には、4年間における学びを通して、豊かな教養と旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚とコミュニケーション能力を身につけることが求められます。

通学課程においては、厳正な成績評価のもと、以下のとおり可視的な成果を得た学生に卒業を認定し、自信をもって社会へ送り出します。

1. 具体的行動の証として、質・量ともに一定以上の書籍を読み、かつ学内外における活動（海外留学・研修、インターンシップ、奉仕・委員会活動、課外活動その他の実社会活動）1つ以上を実践している。
2. 意欲的挑戦の証として、資格・技能審査試験を受験し、又はコンテスト等に応募し、合格又は一定以上の成果を得ている。
3. 問題解決のために必要な基礎コンピテンシー（C-PLATS）として、次に掲げる能力を身につけている。
 - (1) 社会性基盤：チームワーク、社会的責任能力
 - (2) 思考基盤：創造力、計画力、論理的思考力、分析力
 - (3) 行動基盤：コミュニケーション力、プレゼンテーション力、リーダーシップ、行動力
4. 以上の成果を得るために学び、考え、行動したことについて、初対面の相手（外部評価員）に対しプレゼンテーションを行い、質疑応答を経て、就業力を有するものと認められる。

2.4. 学修成果の実証

2.3 に示した学位授与の方針で最も重要な点は、4 つめの項目の、「初対面の相手に対するプレゼンテーションと質疑応答を経て、就業力を有するものと認められる」という点にある。すなわち、4 年間を通した統合的な学修成果をパフォーマンスにより「実証」することで「学士」を認定するということである。

この最終的な実証に向けて成長のようすを可視化し、自己評価および学内外を含めた他者評価を実現するための仕組みとして、必修科目において定期的なプレゼンテーションと「映像ポートフォリオ」による映像記録を実施している。全ての学生は入学時にスピーチの様子を撮影し、映像記録を蓄えておく。そして、必修科目において学年末に 1 年間の正課内外の全ての学びを統合的に振り返り、その成果を実証するプレゼンテーションを行う。その際、学外の外部評価員による質疑応答やフィードバックを行う。このプレゼンテーションと質疑応答のようすは撮影し、「映像ポートフォリオ」システムに映像として記録する。入学時の 1 本と、

各学年末の 4 本、合わせて 5 本の映像により 4 年間の成長のようすが可視化される。

4 年次の終わりには、この最終段階として、5 分間のプレゼンテーションと 20 分間の質疑応答を行う。ここで、就職、進学、コンテスト入賞等の課題を達成できる（＝就業力を有している）と判定されることが学士課程の最終目標である。

3. 学士課程教育のグランドデザイン

3.1. 学士課程教育のグランドデザイン

本学における 4 年間にわたる学士課程は、2.4 にて述べた最終目標に向けた学修が果たされるように総合的にデザインされていなければならない。本学では、実証に価する力を学生が身につけるための設計図として、「学士課程答申」において提示されている「学士力」も念頭に置きながら、学士として修得していることが望ましい要素を検討し、「4 年間にわたるリベラルアーツ型教育のグランドデザイン」を 2011 年に制定した。これは、4 年間の学士課程において、学生がどのような要素をどのように段階的に身につけていくかを示したものであり、本学の全ての教育活動はこれに基づいて設計するものと位置づけている。

グランドデザインに定義されている具体的要素は、「生命力、希望」「自己教育（主体的学習）」「知的誠実性」「基礎学力」「キャリア選択」「ライティング能力（アカデミックライティング）」「外国語コミュニケーション力」「情報活用力」「一般常識（時事問題など）」「読書（情報検索）」「資格」「実践」「メジャー（自分で創る専門性）」「C-PLATS（社会人基礎力）」である。グランドデザインでは、これらのそれぞれについて、4 年間のどの時期にどの程度の水準を達成しているべきか、そしてそれをどのような方法で行うかについて、マトリックス状に示している。グランドデザインの全体像を図 1 に示す。

「学士課程答申」において特に強く言及された「単位制度の実質化」「厳格な成績評価」「参加型授業の促進」についても、全ての授業においてこれを意識し実現に向けて努力していくことが明記されている。

3.2. コア科目としての必修科目の全体設計

本学では、4 年生までの全ての学年において、全学共通の必修科目を設定している。1 年次には「キャリアデザインⅠ～Ⅱ」、2 年次には「キャリアデザインⅢ～Ⅳ」、3 年次には「ゼミナールⅠ～Ⅱ」、そして 4 年次には「卒

図1 4年間にわたるリベラルアーツ型教育のグランドデザイン

表1 グランドデザインに基づく「キャリアデザイン」2年間の学習内容のマトリックス

身につける能力など	1 年次 キャリアデザインⅠ	1 年次 キャリアデザインⅡ	2 年次 キャリアデザインⅢ	2 年次 キャリアデザインⅣ
自己教育	・ 毎回の課題提出 (継続的な学習習慣)			
一般常識	・ 新聞コラムの書写、意見論述	・ 新聞コラムの書写、意見論述	・ 新聞・雑誌記事関連課題	・ 新聞・雑誌記事関連課題
ライティング能力	・ 800 文字レポート作成	・ インタビュー記事作成 (A4 一枚)	・ 4000 文字論文執筆 ・ 論文の書き方についての e ラーニング	・ インタビュー記事作成 (A4 二枚、2000 文字以上)
図書館、情報検索、文献利用	・ レポートのための資料収集と活用	・ 自己のキャリアデザインのための調査	・ 論文執筆のための資料収集と活用	・ 自己のキャリアデザインのための調査
社会人基礎力・チームワーク	・ グループによるポスター発表	・ インタビュープロジェクト (学内教職員への、キャリアに関するインタビューと記事作成)		・ インタビュープロジェクト (学外社会人 (本学卒業生) へのインタビューと記事作成)
キャリア選択		・ 「私のキャリアデザイン」をテーマに 1 年間の学びを自己分析		・ 「私のキャリアデザイン」をテーマに 1 年間の学びを自己分析
プレゼンによる実証とその録画及び映像ポートフォリオへの記録	・ 1 分間スピーチ	・ 上記テーマをもとに、外部の社会人の前で 3 分間プレゼン+3 分間質疑応答		・ 上記テーマをもとに、外部の社会人の前で 5 分間プレゼン+5 分間質疑応答

業研究」がそれぞれ配置されている。この4年間を通した必修科目は、グランドデザインに沿ったリベラルアーツ型教育のコアとなる科目である。これは、あらゆる学習活動の基盤となる最低限の力を身につける場であるとともに、2.4にて述べた「全ての学修成果の実証」の場としても位置づけられる。

例として、1～2年次の「キャリアデザインⅠ～Ⅳ」の学習活動がどのように設計されているかを表1に示す。大学での学びの基礎力として、「自己教育」「ライティング能力」「情報検索」「チームワーク」などを身につける学習活動を行い、知的活動に欠かせないアカデミックなライティング能力や、PBLをはじめとするアクティブラーニングに対応できる力を養成する。

各年次の最後には、広義の「キャリア」と連動させ、自己分析とともに「1年間の学び」を振り返り、その成果をプレゼンテーションと質疑応答により実証するようすを「映像ポートフォリオ」に記録する。「ゼミナール」「卒業研究」においても、同様にプレゼンテーションによる学修成果の実証を行う。

4 年間を通して段階的に質保証を図るため、必修

科目はその単位が修得できなければ次の必修科目を履修できず、再履修によって求められる力を身につけてから次へ進むことと定め、従来の学年管理ではなく到達レベルでの管理を徹底している。

これら必修科目は原則的に全て専任教員が担当し、とくに「キャリアデザインⅠ～Ⅳ」は全学部・全クラス共通のシラバスに基づき、科目コーディネーターのもとでの授業運営がなされている。

3.3. グランドデザインに基づくその他の取り組み

学びの実証のためのプレゼンテーションは必修科目において全ての学生が行うことはすでに述べた通りだが、それを全学規模で共有し、全体を学びの場とする取り組みとして、2011年度より「全学プレゼンテーション大会」を開催している。必修クラス内での発表が予選を兼ね、学年規模での2次予選を経て、高い評価を受けた数名がそれぞれの学年から選ばれ、決勝大会でプレゼンテーションを披露する。この取り組み自体が、グランドデザインに基づく学びの成果を大学として可視化するものと言える。

「情報活用力」の項目においては、情報教育に携わる教職員チームが全学生対象に1年次・3年次にそれぞれ情報活用力診断テストRastiの受験を実施し、情報活用力の伸長を測定している。

3.4. グランドデザインに基づく取り組みの検証

3.2、3.3で示したように、グランドデザインに基づいた教育の設計が進められているところもある一方で、そのほかにグランドデザインに基づいた取り組みが、どのようにどの程度行われているかの検証はまだ不十分である。授業をはじめとした本学におけるあらゆる活動において、グランドデザインに沿った設計と運営がなされているかどうかや、実際にグランドデザインに示された目標を達成した学生の割合などを明らかにし、検証と改善を繰り返していかなければならない。

とくに、グランドデザインには全ての授業において実施すると明記されている項目として、2.5にて述べた単位の実質化や厳正な成績評価をはじめ、2回以上の論述式課題の実施およびフィードバックや、1冊以上の本を読みそれに関するアウトプットを課すこと、一般常識・時事問題と関連させた授業設計などがあるが、まだそれを十分に検証できる体制が整っていない。大学改革における最重要事項は授業の組織的改革であるとの指摘の通り（絹川 2006）、学生が大学において最も多くの時間を費やす授業において、グランドデザインに基づいた設計と実施、そして検証を全学的・組織的に行うことが急務である。

4. おわりに

本稿では、昨今の高等教育における現状の中で、いかに本学が質保証のための学士課程教育の基礎設計を行ってきたかをまとめ、その現状と課題について報告した。

本学の教育方針はグランドデザインにおいて具体的な指針として示されており、教育活動に携わる全ての教職員がこれを参照できる状態にある。しかし実際の教育活動において、依然としてその実現に向けての課題は多い。

具体的、客観的なデータをもとに検証を行うとともに、本学における質保証とそのためのグランドデザインについて、FD等を通してその意義を共通認識することや、より適当なものへと改善していくプロセスが必要である。

参考文献

- 絹川正吉 (2006) 『大学教育のガバナンスとエクセレンス』地域科学研究会, 東京.
- 大手前大学 (2014) 大手前大学の概要、大手前大学 Web サイト, 兵庫 (2014年2月15日アクセス) .
- 中教審 (2005) 我が国の高等教育の将来像 (答申), 中央教育審議会.
- 中教審 (2008) 学士課程教育の構築に向けて (答申), 中央教育審議会.
- 中教審 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 中央教育審議会.

SUMMARY

In Otemae University, an image of the graduates had been defined for the purpose of the quality assurance of education, and the grand design of the baccalaureate degree program had been established. All the educational activity is to be designed based on the grand design, in order for all students to reach the goal. In this paper, the issues of the quality assurance of the baccalaureate degree program which is required recently are overviewed. Then the approaches of the quality assurance which are considered and carried out in Otemae University are introduced, with a focus on the grand design.

KEYWORDS: BACCALAUREATE DEGREE PROGRAM, QUALITY ASSURANCE OF GRADUATE, DEMONSTRATION OF LEARNING OUTCOME, GRAND DESIGN